

審査の結果の要旨

氏名 金 玫延

本論文は、韓国において西洋文化が導入された1876年の開港以後の建築西洋化を解明することを目的としている。

西洋文化は王室をはじめとする上流階級に影響を及ぼすことになる。とくに朝鮮王朝の宮殿における外国人の接客空間が、朝鮮王朝の西洋文化理解度のようなものであり、それに対する反応がどのようなものであるかをダイレクトに示す場であった。一方そこは、自国の伝統儀礼が守られ、かつその儀礼に応じる空間でもあった。本論文は、このように「伝統」と「西洋」が共存していた朝鮮王朝の宮殿の接客空間の、空間構成、室内意匠、家具等の実態を明らかにし、その西洋化過程を究明しようとするものである。研究対象は、宮殿の謁見所を中心に、迎接室、宴会所、王室賓館である。

これらの施設は西洋化の影響がもっともはやく及ぼされた建築であり、また、朝鮮政府が主体となって西洋化・近代化を進めた建築でもある。それにもかかわらず、韓国近代建築を論ずるにあたって、開港期の宮殿建築に関する研究はほとんど行なわれてこなかった。宮殿建築の西洋化過程を追う研究においても、論考の対象とされてきたのは現存する慶運宮の西洋館と、日韓併合以降、日本によって西洋化された昌徳宮に限られてきた。

本論文では視野を広げ、伝統的な宮殿建築も含め、開港以降王宮として用いられたすべての宮殿を取り上げ、そのなかで外国人とのかかわりが深かった接客空間に着目している。

開港期の歴史的背景と王宮の関係は、

1. 開港直後の昌徳宮を用いた時期
2. 正宮である景福宮を用いた時期
3. 王妃暗殺を契機として高宗がロシア公使館に滞在した時期
4. 新しく造営された慶運宮を用いた時期

に分類される。

韓国宮殿における最初の洋風建築は、1888年頃に景福宮に建てられた「観文閣」である。1891年には景福宮に高宗の書斎が建設される。以後、慶運宮期にはいると多数の洋風建築が建設されてゆくようになる。

開港期における昌徳宮の宮殿建築については、『高宗実録』と『承政院日記』によって、この時期の外国人謁見を調べている。謁見所はすべて便殿の性格をもつ建物であり、「殿」または「堂」がつくヒエラルキーの高い建築であったことが知られる。そこでは伝統儀礼が用いられていたが、次第に洋風の要素が導入されていく。その実例として、メレンドルフの謁見からその作法を見ると、そこでは礼儀作法から室内意匠まで韓国伝統に則ったものだった。日本公使を謁見する高宗は座礼であったが、清使節の謁見の場合は高宗が「楹外」まで出て迎接し、「茶礼」や「椅子」まで用いられた。また、外国人宴会場の「席次」についても考察を加えている。ふるまわれた料理は西洋風が加えられた折衷様式であったことも明らかにされている。

景福宮期に入って外交官との謁見が増加する時期になっても、洋風の謁見所は新築されなかった。謁見所として用いられた伝統建築は、いずれも王の執務室の性格をもつものであった。ただ、王の姿勢は「座礼」から「立礼」に変わっていった。景福宮の多数の謁見所のうち中心となったのは「乾清宮」であった。この建物の「長安堂」の「大庁」で謁見が行われた。王と王妃の非公式謁見所は、公式謁見所より西洋化が進められていたことも知られる。

ロシア公使館の外国人謁見所期と考えられる時代には、高宗はほとんど外部に出なかったと考えられてきたが、外国人の公式謁見のためには慶運宮に出かけていたことが明らかになった。一方、非公式謁見はロシア公使館で行われていた。この時期には西洋化された意匠要素はあまり見られなかったが、日本の依仁親王の謁見では、西洋式の「握手の礼」が取られ、親王には椅子が用意された。

慶運宮期の外国人謁見所は、1904年までの公式謁見では韓国伝統建築が用いられ、非公式謁見では洋風建築がしばしば用いられた。西洋化された建築には「威寧殿」と「徳弘殿」があった。1904年以後登場する洋風の謁見所は「惇徳殿」である。しかしこの建物は第一次日韓協約の影響による受動的な採用であった。

外国賓客の迎賓館と宿舎としては、メレンドルフ邸、統理交渉通商事務衛門の接待用官邸、大観亭、漢城賓館（ソントグホテル）が、順次存在したことを明らかにした。

以上、本論文は開港期の韓国西洋化の過程を実証したもので、斯界の学術研究に資するところ大である。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。